

京都大学	博士（文学）	氏名	土屋 隆史
論文題目	古墳時代の日朝交流と金工品		
（論文内容の要旨） 本論文は、古墳時代における倭の対外交流の中でも大きな比重を占めていたと考えられる倭と朝鮮半島南部諸勢力との交流の一樣相を、金工品の分析を通して復元することを目的とする。金工品は、金属に細工が施された工芸品の一種であり、冠・帯金具・飾履といった金銅製装身具や、装飾付大刀・胡籙金具といった武具、装飾馬具などが挙げられる。これらは、古墳時代に大陸から朝鮮半島を経由して日本列島に伝播してきた。金工品の製作には金や銀などの稀少な素材、高度な技術が必要とされることから、この時期の金工品は基本的に王権などの有力集団の管理下におかれて製作されていたことが予想される。そのため金工品には、所有者に対する製作側からの「評価」が反映され、他地域へ移転した場合には、その背景に単なる私的交流を越えた政治的関係性が想定される。このため、古墳時代における日本列島と朝鮮半島の政治的交流に迫りうる資料である。 倭で出土する金工品の故地は時期によって異なるが、百済、新羅、大加耶の影響が顕著であることから、これらの地域の金工品の動向をさぐる必要がある。本稿では、これらの地域にみられる金工品の中でも胡籙金具、飾履、冠に注目した。胡籙金具は矢を入れる器の一種である胡籙を飾る金具であり、飾履・冠はそれぞれ足と頭を飾る金具である。それぞれ用途は異なると予想されるが、全て朝鮮半島を経由して日本列島に伝播した金工品の一種であるということには変わりなく、製作に必要となる素材や技術は共通する部分が多い。本論文では、それぞれの遺物を純粋に金工品の一種として取り扱い、装身具、武具、馬具といった多様な金工品と比較検討しながら、その社会的機能に注目した。 具体的には、金工品の調査を通して得た製作技術や各属性の情報を、以下のようにして分析することとした。 ・金工品の中でも時間性を反映する属性に注目することで、編年を作成する。 ・地域性を反映する属性に注目し、編年の時間軸に沿って各地域での金工品の展開様相を整理する。 ・分布状況や出土古墳の階層性を検討することで、各地の諸勢力による金工品の配布戦略を探る。 ・朝鮮半島南部諸勢力の金工品配布戦略と倭における金工品の受容様相をあわせて検討することで、朝鮮半島南部諸勢力側の狙いからみた日朝交流の様相を探る。 ・日朝交流の結果、倭で製作されるようになる金工品が、倭国内においてどのような			

戦略のもとに配布されていたかを検討することで、倭の側からみた朝鮮半島南部諸勢力との交流の狙いを探る。

第Ⅰ部「朝鮮半島における胡籐金具の展開」の第1章では、胡籐金具の各部位に装着される吊手金具・収納部金具・勾玉状金具・帯金具を、属性のまとまりをもとにして、いくつかの形式に分類した。さらに、吊手金具・収納部金具・勾玉状金具・帯金具の形式の組み合わせを検討することで、胡籐金具を構成する各部位の金具のまとまりとしての胡籐金具群を設定した。そして、吊手金具と収納部金具の属性相関を根拠に胡籐金具群の変化の方向性を見極め、共伴遺物の編年から想定した変化の妥当性を検証した。こうして得られた情報をもとに、それぞれの胡籐金具群の併行関係を定め、胡籐金具の変遷過程を3つの段階をもって把握した。このような分析によって、胡籐金具の編年を作成することができた。

第2章では、朝鮮半島南部における胡籐金具の分布状況を検討し、その地域性を政治領域と関連付けて解釈した。その結果、百済、新羅、大加耶、阿羅伽耶でそれぞれ地域性がみられることを確認した。

第3章では、百済における胡籐金具の展開過程を検討した。百済ではⅠ段階（4世紀末～5世紀前葉）から独自の胡籐金具の製作が開始された。おそらく高句麗の影響を受けて出現したものと考えられる。百済では各時期に共通して、金銅装を頂点とした素材の違いに基づく、配布の格差付け戦略がみられた。また、Ⅱ段階（5世紀中葉～後葉）になると、都のあった漢城周辺でなく、地方各地に向けて分散的に胡籐金具が配布されるようになった。百済では、地方の集団に百済王室と共通の冠帽や飾履などの金工品を配布し、それを媒介とした地方支配を通して社会統合を進めるという戦略がみられたが、これは胡籐金具にも通じるものであった。Ⅲ段階（5世紀末～6世紀前葉）にも胡籐金具はみられるが出土数は少なくなり、泗沘期には胡籐金具はみられなくなった。

第4章では、新羅における胡籐金具の展開過程を検討した。新羅ではⅠ段階（4世紀後葉～5世紀前葉）から独自の胡籐金具の製作が開始された。百済と同様に、高句麗の影響を受けて出現したものと考えられる。Ⅰ段階の双方中円形Ⅰa群は釜山、倭などにも配布されており、分布域が広い。龍文透彫帯金具と同様に、配布を通じて新羅王権との紐帯を形成し、新羅世界の広がりをも明確にする狙いがあったと考えられる。Ⅱ段階（5世紀中葉～後葉）になると、金銅装からなる双方中円形Ⅰa群・双方中円形Ⅱa群と、銀装・鉄装からなる短冊形AⅡ群・方形AⅡ群の間に、金銅装を上位とした配布の格差付け戦略が生まれた。これも、帯金具や冠を始めとした他の金工品にみられた素材による格差付けと同様の配布戦略であった。Ⅲ段階（5世紀末～6世紀中葉）になると、玉虫装飾やガラス玉装飾、金象嵌のような装飾性の高い胡籐金具がみられるようになった。これは、金銅装に加えた新しい配布の格差を示す方法であ

ろう。装飾馬具からも、この時期にガラス材などの特殊な素材を用いた格差付けが生まれたことが指摘されている。このように、新羅における胡籐金具の配布戦略は、各時期の他の金工品にみられた配布戦略と共通性が高い。胡籐金具は着装型金工品のような服飾品ではないが、地方支配の一手段として機能していたと考えられる。

第5章では、大加耶における胡籐金具の展開過程を検討した。大加耶ではⅡ段階（5世紀中葉～後葉）から胡籐金具が多く出土するようになる。古相の玉田M1号墳の時期には、新羅と百済から配布されたものが多く認められたが、新相の玉田M3号墳の時期には新羅・百済工人の関与のもと、大加耶で製作される胡籐金具が多くなった。Ⅲ段階（5世紀末～6世紀中葉）になると、百済と大加耶の工人による相互の技術交流の中で製作された胡籐金具も現れ、製作における大加耶の主体性が徐々に強くなっていった。

また、大加耶による胡籐金具の配布は、新羅に由来するものと百済に由来するもので異なる戦略がみられた。前者は高霊・陝川に加えて、阿羅伽耶、倭といった外部の地域に多く配布されていた。これにより外部地域と政治的紐帯を形成しようという狙いがあったと考えられる。一方、後者は阿羅伽耶、倭に配布されることはほとんどなく、百済と大加耶の領域境付近の拠点となるところへ配布されていた。ここからは、臣属関係を形成するような、社会統合の手段としての狙いがあったようである。

第6章では、阿羅伽耶における胡籐金具の展開過程を検討した。阿羅伽耶の胡籐金具の多くは大加耶から配布された双方中円形Ⅱa群であったが、一部に大加耶の双方中円形Ⅱa群を模倣しようとして生まれた阿羅伽耶独自の特徴をもつ胡籐金具もみられた。わずかではあるが、阿羅伽耶でも胡籐金具が製作されていたようである。

第Ⅱ部では、日本列島における胡籐金具の展開過程を検討した。まず第7章では、まず倭における胡籐金具の系譜を時期ごとに整理した。その結果、Ⅰ段階（5世紀前葉）では新羅・百済、Ⅱ段階（5世紀中葉～後葉）では新羅・百済に加えて大加耶、Ⅲ段階（5世紀末～6世紀中葉）では大加耶に由来する胡籐金具がみられることがわかった。次に、倭における胡籐金具の分布状況を検討した。Ⅰ・Ⅱ段階では畿内地域にはあまりみられず、瀬戸内地域・北部九州地域に多く分布するが、Ⅲ段階になると畿内地域に集中するようになり、倭における分布域や出土数も拡大した。Ⅲ段階は倭王権が胡籐金具を受容し始めた時期であったと考えられる。

最後に、朝鮮半島南部諸勢力による胡籐金具の配布戦略と、倭における胡籐金具の受容様相をあわせて検討することで、主に朝鮮半島南部諸勢力側の狙いからみた日朝交流の様相を考察した。Ⅰ段階では、新羅が東萊福泉洞古墳群の勢力を介して倭へ胡籐金具を配布していた。倭の受け手は主に地方の有力首長であったようであり、倭王権ではなかった。新羅には双方中円形Ⅰa群を広い地域に配布し、それを通じて新羅王権との紐帯を形成することで新羅世界の広がりを広く示そうとする狙いがあったと考

えられる。新羅は倭の地方の有力首長とも積極的に交流をおこなっていたことが伺える。Ⅱ段階では、大加耶が倭の地方の有力首長に胡籐金具を配布していた。大加耶には双方中円形Ⅱa群のような新羅に由来する胡籐金具を外部の有力集団へ重点的に配布し、それを通じて政治的紐帯を形成する狙いがあったようである。大加耶が倭の地方の有力首長とも積極的に交流をおこなっていたことが伺える。Ⅲ段階には、大加耶に由来する胡籐金具が倭で広く分布するようになる。この時期の大加耶では胡籐金具の配布は低調であり、倭でみられる胡籐金具は大加耶の思惑で配布されたものでない。大加耶から渡来してきた金工技術をもつ渡来人が倭王権側によって編成され、倭国内で製作されたものであった。これは、倭王権側の働きかけによるものであったと考えられるだろう。

第8章「倭における^{やなぐい}胡籐の出現過程」では、胡籐金具にわずかに残る有機質に注目し、劣化によって本来の姿がよくわからない胡籐自体の構造について検討した。とくにⅢ段階（5世紀末～6世紀中葉）に多くみられる胡籐構造（Ⅲ群）について、先行研究の論点を整理したうえで、残存状態の良好な事例をもとにしながら形態復元案を示した。そして、これがⅠ段階（5世紀前葉）に倭で出現した胡籐構造（Ⅰ群）に由来するものであり、Ⅱ群、Ⅲ群へ変化を遂げて、やがて正倉院宝物中にみられる奈良時代の「^{やなぐい}胡籐」へと繋がったことを示した。

第9章「倭における平胡籐の出現過程」では、従来用途がよくわかっていなかった金具が、正倉院宝物にみられる奈良時代の「平胡籐」の祖形となる胡籐に装着された金具である可能性が高いことを示した。金具からみる限り、平胡籐の祖形はMT15型式期頃（6世紀初頭）には出現していたようである。このように第8、9章では、胡籐という日朝交流の結果伝わった文物が日本列島に定着する過程を示した。

第Ⅲ部「倭王権と金工品」のうち、第10章では、金銅製飾履の底板と側板の接合方法・結合技法に地域性と時間的变化がみられることを明らかにし、この視点に注目しながら、百済、新羅、倭の飾履の展開過程を整理した。倭では、TK47～MT15型式期（5世紀末～6世紀初頭）に、Ⅱ群C型という形態が出現した。透彫文様やガラス玉の接合は百済に由来するものではあるものの、そこには倭独自の特徴がみられ、また底板と側板の接合方法・結合技法は倭でのみみられるものであった。これは百済工人関与のもと、倭で製作されたものであったと考える。そしてTK10型式期（6世紀前葉）以降にみられたⅡ群A型の飾履は、底板と側板の接合方法は百済の飾履と共通するが、底板と側板の結合技法の違いや文様の崩れがみられた。これもやはり百済工人が関与のもと、倭で製作されていたと考えられる。このように、飾履は倭で出現してまもなくして受容され、倭国内で製作が開始されたようである。

第11章では、広帯二山式冠の原型の候補となる朝鮮半島の冠と比較し、また蝶形金具、ガラス玉接合技法、文様の変化に注目することで、広帯二山式冠の出現過程を示

した。その結果、広帯二山式冠は、百済の冠帽・飾履の文様と加耶の冠の立飾を変形し、倭在来の織物製冠の形状を模倣して、倭において生み出された倭独自の冠であったことがわかった。百済と加耶の要素がみられることから、百済工人と加耶工人が製作に関与していたようであり、また倭在来の織物製冠を知る倭工人も一定数関与していたと考えられる。

終章「古墳時代の日朝交流と金工品」では、倭における金工品の受容の画期となったTK47型式期（5世紀末頃）前後における日朝交流の様相を考察した。とくに、その交流の結果倭で製作されるようになった金工品が、倭国内でどのような戦略のもとに配布されていたのかを検討することで、倭の側からみた朝鮮半島南部諸勢力との交流の狙いに注目した。

この時期、胡籙金具には大加耶工人、飾履には百済工人、そして広帯二山式冠には百済工人と加耶工人が関与し、これらは倭国内で製作されていた。胡籙金具の分布が畿内地域に集中するようになり、また飾履、広帯二山式冠の変化が倭国内で共通することから、倭王権によって渡来工人が編成されたのであろう。こうして、独自性がみられる定型性の高い金工品が、倭で創出されたのである。金工技術をもった渡来人の大規模な渡来がともなうことから、日朝交流の画期の一つとなろう。

また、この時期に製作された胡籙金具、飾履、広帯二山式冠をはじめとした金工品は、それぞれ特定の階層の中で、形式や文様系列に基づく配り分けがなされていた可能性がある。それは所有者の職掌などに基づいたもので、特定階層をヨコに区分する機能があったと考えられる。

このような金工品の倭国内での製作、そして配り分けは、雄略朝期における「天下観」の形成にともなう独自性の追求、そして「人制」による集団の再編成など、より中央集権的な支配体制の形成を目指して新しい身分秩序が必要となったことに起因するものであっただろう。金工技術をもった渡来人を倭王権のもとに編成することで、この新しい身分秩序の道具をつくるのが、TK47型式期における大加耶・百済との交流に対する倭の狙いの1つであったと考えられる。

そして、倭王権によるこの金工品の配布戦略は継体朝に引き継がれ、雄略朝期に端を発する金工品を用いた新しい身分秩序が本格的に実践されるに至る。やがてTK43型式期（6世紀後葉）に倭国内で装飾付大刀の本格的な製作が開始されるなど、金工品を用いた身分秩序は形を変えて継続されていき、やがて冠位12階制の中で服飾制度として整えられる。金工品、そして日朝交流は古墳時代における身分秩序形成のうえで重要な役割を果たしていたのである。

（論文審査の結果の要旨）

5・6世紀の朝鮮半島と日本列島の間では、さまざまな人・モノ・情報の交流がおこなわれた。その実態の一端は、『古事記』・『日本書紀』をはじめとするさまざまな文献記録を通して研究されてきたが、日本各地で発見された外来系考古資料を通して、文献記録には現れない、当時の地域間交流の実態が明らかにできる可能性が示されてきた。

こうした研究を進めるために注目されてきた遺物の1つが、金属に細工が施された工芸品である金工品である。金工品は、素材の希少性や製作技術の複雑さから、誰でもが作れるものではなく、有力者集団のもとに管理された工房で製作され、さまざまな意味合いをもって流通・使用されたものと考えられてきた。論者は、そうした金工品のもつ特性に注目し、朝鮮半島南部から日本列島にかけて使用された金工品の時空的位置づけをおこない、その分布状況を検討して、金工品の製作・流通・使用の実態とその変遷を明らかにし、5・6世紀における朝鮮半島と日本列島における地域間関係の変遷とその歴史的意味の復元を試みた。本論文において論者は、種々の金工品のうち、矢を収納する容器の1つである胡籐を装飾するためにつけられた金具（胡籐金具）と、金属製装身具の1つである冠と飾履を取り上げた。

まず第Ⅰ部第1章では、朝鮮半島各地で出土した胡籐金具を、個々の金具ごとに分類した上で、それらの組合せを13群に整理した。そして、各群の時間的・地域的特性を検討した結果、長方形から半円形へという収納部断面の形状の変化が、地域を越えてほぼ同じ時期におきたことを明かにした。胡籐金具に地域性が存在することや、収納部の形状が多様であることは、一部の地域を対象とした研究において指摘されてきた。しかしそうした状況を、朝鮮半島南部および日本列島にかけての広がりの中で総合的に把握することができた点は大きく評価できる。

次に、特徴的な金具および胡籐金具群の分布の特徴を把握した（第2章）上で、地域ごとの様相の分析がおこなわれた（第3章～第6章）。中でも第3章でとりあげた百済地域での出土資料は、最近になってその類例が増加してきたものの、日本の学界ではほとんど検討の対象とされてこなかったものである。論者は、大韓民国忠南大学校への留学をきっかけとして実物の検討を進め、その成果の一部を韓国で発表してきた。そうした研究成果が、今回日本で紹介されることの意味は大きい。百済の胡籐金具の実態を明らかにしたことによって、新羅の資料との違いが明確化すると共に、洛東江以西地域に広がる大加耶・阿羅伽耶においても、百済系の胡籐金具が存在することが明かになったことは、当時の地域間交流の実態を明らかにする上で重要な成果である（第4章～第6章）。

朝鮮半島南部の様相に対する研究成果を元に、第Ⅱ部第7章では、日本列島で出土した胡籐金具の様相が検討された。その結果、Ⅰ段階（5世紀前葉）では新羅・百済、Ⅱ段階（5世紀中～後葉）では新羅・百済・大加耶、Ⅲ段階（5世紀末～6世紀中葉）では大加耶の胡籐金具が主に用いられたことが明かにされた。またⅠ・Ⅱ段階

では瀬戸内地域・北部九州地域での出土例が多いのに対し、Ⅲ段階では畿内地域に集中し、出土例も増加することを指摘した。このように、胡籐金具の具体的な起源地とその変遷を明かにしたことで、5・6世紀における日朝交流の実態を検討する上で重要な手がかりが提供されたと考える。そして、胡籐金具の検討と、胡籐の具体的な形状復元作業を通じた、正倉院宝物に含まれる^{やなぐい}胡籐・平胡籐への変化過程の予察（第8・9章）は、古代・中世の武具研究にも貢献しうる研究成果である。

第Ⅲ部では、朝鮮半島および日本列島各地で製作・副葬された金銅製飾履（第10章）と、技術的には朝鮮半島と深い関係がある一方、朝鮮半島の冠とは異なる形状をもつ広帯二山冠（第11章）の検討がおこなわれた。論者は、多くの出土資料を実際に検討することを通して、金銅板の結合技法・施文された文様の系統・ガラス玉の接合技法の実態を明らかにした。そしてその検討結果をもとに、百済で用いられていた冠・飾履を受け入れながらも、倭や大加耶の要素が加えられて、日本列島特有の冠・飾履が製作・使用されるようになった具体的な過程を復元した。こうした変化の方向性については、これまでも予察的に指摘されてきていたが、それを実証的に検討した点は大いに評価できよう。

以上のように本論文では、胡籐金具と金銅製飾履・冠という3種類の金工品の系統と変遷を、朝鮮半島南部および日本列島の全域において検討することによって、5・6世紀における日朝関係の一端を明らかにすることができた。今後は、その他の金工品や土器における同様な研究との対比・総合をおこなうことにより、論者が考古学の立場から、古代日朝関係史が叙述できるようになることを期待したい。

ただ本論文には、今後さらに検討されるべき問題点も存在する。特に本論文において、考古資料の示す地域性や分布上の特徴を、全て「配布」という概念を用いて解釈しようとした点については再考の余地がある。今後は、金工品がどのように製作され、流通・使用されたのかを実証的に検討する中で、「配布」の実態を明らかにする必要があるだろう。本論文でおこなわれた検討を通して、そうした研究を進めるための材料は十分に集められており、論者のさらなる研鑽が望まれる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。